

これから広島大学が歩むべき道

—統合の視点から大学全体を展望するー

五月十八日に、「真の総合大学」および「卓越した研究拠点（いわゆるCOE）などについて」についてインタビューをおこなつた。聞き手は、越智委員長と早川副委員長。

広報委員会=学長は「真の総合大学」という表現をお使いになりますが、その具体像を語つていただけませんか。

学長=今年、各所に分散していた部局等が統合移転を完了したわけだが、このことでようやく統合の視点から大学全体を展望できることになつた。言い換えれば、マルチバーシティだった形態から真のユニバーシティへと変わることだ。ただ一箇所に集まるというのではなく、そのことをベースにして各組織が有機的に統合することが重要で、そのように結びあつた大学の姿を『真の総合大学』と呼んでいる。

最近議論されている学部教育改革はそのための方策の一つだ。全学がこれまでの一般教育を見直して、一致団結して教養的教育と専門教育とに取り組むことで、これまでとは違つた広島大学の新しい姿が見えてくると思う。また、こうした学部教育の改革や充実なしに大学院教育の問題は進展しないと



各学部が奮起して努力し、COEになれるよう頑張ってほしい。

そのとおり。統合されてはじめて『広島大学』という意識が芽生えてくる。同窓会も同じだ。まだ具体化していないが、私は名譽教授の会なども考へている。われわれ全学のメンバーが、学部などの垣根を取り払つて『広島大学』の四文字のもとに有機的に統合する。そのための意識改革が必要だ。そうでなければ、統合移転した意味が半減する。

最近は、広島大学も国際化し、世界各国からの留学生がきていれる。彼らが卒業し、母國に帰る。また、本学の卒業生もこれから諸外国に出ていく。そこでも、広島大学同窓生といふことでコミュニケーションがとれるようになるはずだ。

このたび、「卓越した研究拠点」についての話を部局長連絡会議でお話しされた、とのことです。が、現在どれほどの対応がありますか。

工学部より二件、理学部より一件、原爆放射能医学研究所（原医研）より一件、計四件が出されている。残念だが、広島大学はまだ全国的にCOE

先生がみられて可能性のあるCOEに該当するような研究テーマなど、他にまだありますか。

ある。理学部の発生生物学の吉里勝利教授の「肝臓やイモリの肢の再生」即ち「細胞分化によるオーガン（組織・器官）の構築」の研究なども東京大学との共同研究として大きなプロジェクトであり、可能性があると思う。文化系でもCOEに対応できるプロジェクトが考えられる。たとえば、教育学部の武村重和教授の「識字教育」の研究などは、ユネスコへの協力という形で国際的なプロジェクトを持つて見える。少し見渡してもこれほどあり、各学部が奮起して努力し、COEになれるよう頑張つて欲しい。

考へている。これらを具體化させる中で、これから広島大学が歩むべき方向はおのずから開かれてくるはずだ。**有機的統合の視点は、同窓会などについても指摘されきましたね。**
 研究者がいる場合に設置されやすい。広島大学では、原医研が原爆放射線の研究ということで、この三十年来原爆被爆者の研究を行つてきた実績があり、また、わが国で最も充実した放射線源を持っているから可能性がある。理学部、工学部では、放射光研究や集積化システム研究などの目玉になるものがあり、期待できる。とにかく、ユニークな研究テーマ、業績のある研究者と大きな機器があることが、COEにされる基本的条件だ。